

一九〇一年のルダコフの義和団研究

佐藤 公彦

目次

はじめに

ルダコフ論文の内容

- I (神秘主義的宗派)
- II (大刀会、神拳、義和拳、大拳)
- III (営口での見聞)
- IV (組織、思想、儀式)
- V (義和団の文献と呪術)
- VI (基督教布教問題と政府による義和団取り込み)
- VII (南満洲の「大拳」)
- VIII (吉林省・黒龍江省)

おわりに一批評

はじめに

帝政ロシアの A. B. ルダコフ (Рудаковъ) の「一九〇一年三月二十一日、ウラジオストック」という日付をもつ論文「極東での最近の諸事件における義和団とその意義」は、事件後最も早く出された外国人による義和団研究の一つである。事件の渦中において見聞した報告や印象を綴った当時のロシア人の文章もいくつかあるが(代表的なものに、ヤンチェフスキー『動かざる長城の下で』1903、中国語訳『八国聯軍目撃記』などがある)、資料を集めて科学的に分析したものは、これを嚆矢とする。この論文は、民

国二五年(一九三六年)に出版された『庚子国変記』(中国内乱外禍歴史叢書)の「序言」で、A. スミスの *China in Convulsion* と共に引用され、「ロシアのある作家[ルダコフ]の適切な記述によると、当時の中国『社会では、しだいに、《善き人はキリスト教徒にはならない》という輿論が形成された』のだ」と書かれたのが始めであろうが、一九四九年以後も、満洲地区の義和団の運動を研究した中国語文章の中で時折引用されてきた(たとえば、黎光・張璇如『義和団運動在東北』吉林人民出版社、1981)。しかしその全体的内容については、ロシアでも、中国でも今まできちんと紹介されてきていないようである。この論文が東洋文庫に所蔵されているのを見つけたのは数年前になるが、なにしろロシア語文献だから私の手に負える代物ではなかった。しかし、文章中に引用されている中国語の「掲帖」や咒語、「降壇論」の語句には、珍しい初出のものもあって、是非内容を理解して、全体を把握したいと思わせるものがあつた。それで、ロシア語専攻の大学院生の手を煩わせて、試訳してもらつた。古い時代の難物の文章であつたらしい苦闘の形跡が見られるものだが、本稿は、この試訳の日本語を改作しつつ考えてみたものである。

最も早く出た外国人の研究であると言ったが、上海方面では英米のプロテスタント宣教師たちによる義和団の研究が一九〇〇年の段階で出ている。これらが世界のその後の義和団研究の基本的な流れを作ることになったのだが、これに対してルダコフは以下に見るように、厳しく批判しており、その違いが際立つ研究でもある。まだ硝煙の残る時期に書かれた同時代証言としても、英米宣教師とは違った形でこの中国のナショナリズム運動を見ている点でも、百年後の今なお紹介するに値するものである。

ルダコフはその序文で、自分は南満洲で「義和団」と称する闘士と出会うことになり、この東洋と西洋文化のおそろべき接触の壮大なドラマの第一幕の目撃者になったのだった、それで、一九〇〇年三月から一九〇一年一月にかけて、南満洲、黒龍江で調査・聞き取りを行ない、資料を読んで書いたのだ、と言う。だからロシアにおける義和団研究の嚆矢となったというだけでなく、英米宣教師とは違った視点で義和団を見たこと、また直隸・山東ではなく、「満洲」を観察した点で、いまなお一読の価値を有している。これが、彼の研究を紹介する大きな理由の一つである。

かれはその序文で、自分はこの研究で、それまでに出版された研究、上海で出版された *The Boxer Rising* や、新聞 *Shanghai Mercury* に掲載された論文などの見解¹⁾は、第一は、義和拳（大拳）の

教義思想について、第二には、中国政府の義和団についての態度について、ほとんど誤りに近いことを発見した、と言う。それゆえ、かれの論文はこの二つの側面に多くの紙幅を割いて論じることになっている。以下で、その論を少し詳しく見ながら、評論して行こうと思うが、しかし、彼の研究の歴史的位置について簡単な見取図を呈示しておくことも、その理解にとって必要ではあろう。勿論、筆者にそんな芸当が出来るはずもないから、もっぱら、ロシア科学院東方研究所のボクサニンの評論（『義和団研究一百年』齐鲁書社、2000、333-346 頁所収）に拠って述べておこう。

義和団の源流について、ルダコフは、義和団を中国の長い伝統を持つ秘密社会（教派）の一種と見て、神秘主義はその参加者の中で大きな作用を果たした、かれらは精神的に非の打ちどころがない立派さを追求し、その言行は道家学説の影響を深く受けている、という。この運動は、互いに違っていて中国とはうまくいかないヨーロッパ文化の侵入と、外国企業の拡張とに対する中国の反応である、とする。このヨーロッパ文化について語るとき、かれはキリスト教とそれを布教する宣教師の役割を大変重要視した。

ルダコフの見方によると、義和団は自発的に生まれたものだが、清帝国政府はそれ自身の利益から、義和団の運動を利用して、ある時期に、

¹ *The Boxer Rising: A History of the Boxer Trouble in China*. Paragon

Book Rep. Corp. N.Y. 1967.

義和団が事を起すその組織者の役割を果たした。清政府にこのような態度を取らせた理由は、一つは、広汎な民衆運動が統制が取れなくなることを恐れたからで、もう一つは、(朝廷と義和団の) 双方がかなり意図が一致するところがあると意識したからである。政府について言えば、義和団の運動に対してはいかなる異視も、あるいはどっちつかずの曖昧な態度をも見出すことは出来ない (46 頁)、という。

ルダコフは、西洋列強の中国での行動を譴責している。と同時に、中国当局を咎めている。清国政府は西洋の侵入に対していまだ必要な行為をとらなかったと見たからだ (30 頁)。

しかし、かれは、ロシア人が中国で為した所為を、中国の利益と抵触するものとは見なさなかった。義和団・清軍とロシア軍との衝突は「誤解」だったという (77 頁) 一満洲における軍事的衝突をいうのであろう。

以上がボクサニンのルダコフ論文の論点整理だが、かれは、同時代の A. ストルボスカヤ (1903) と B. カルサコフ『北京事件』(ペテルブルク、1901) を、ルダコフと同じく列強の対中国政策・行動を批判した学者として紹介して、カルサコフの見解を引用している。それを紹介しておく。

ヨーロッパのキリスト教文明が、異教 [中国宗教] を信奉し文化的に独特な中国の民衆にもたらしたのは、偽善と虚言だけだっ

た。ヨーロッパ人は、自分の祖国を熱愛するすべての人々の仇恨と鄙視を得ただけだった。……私が北京で見たのは、人々がなんと冷淡で無情な表情・態度を外国人に示したかということだ。それはわれらが他のいかなる所ででもいまだかつて見たことのないようなものだった。

のちに、ルダコフの研究の中でも触れられるが、この時期の中国人の外国人に対する憎しみと反感がいかに酷いものだったかを「証言」する文章である。義和団事件や一九二〇年代の排日運動を考える時に、中国人民衆が外国人や日本人に見せたこうした憎悪の「感情」を要因の一つに入れないと、その後の事件は充分に理解し得ないのではなかろうか。「祖国への熱愛」が偏狭な外国人への憎悪「感情」とない交ぜになっているのである。中国ナショナリズムのこの偏狭な感情の問題性を冷静に頭に入れておくことが、現在では、歴史研究に必要ななっている。

ルダコフ論文の内容

I (神秘主義宗派)

ヨーロッパの文化的侵入に反対した現在の動き、義和団の騒乱は「宗派」=宗教共同体によって引き起こされた、というのが彼の結論である。この宗派というのは、「大拳」「義和拳」と言い、嘉慶時代の白蓮教の指導者によるものが最初のものであったとして、勞乃宣の白蓮教起源

説を踏襲している。それは、ルダコフがこの運動に宗教性を見たところから、白蓮教説に納得し首肯したものらしい。

これらの反王朝的な宗派には、在理会（教）、保国会〔筆者註：康有為の保国会を宗派に入れているのは疑問であるが〕、殺鬼会、沙鍋会、大刀会などがある。

この神秘主義宗派は、年長の指導者のもとで道教的体操をおこない、金丹（賢者の石）を探求していた。この金丹を入手（結成）できると、不死を与えてくれるものである。そのための手段は道教式体操で、瞑想によって靈魂を超自然的な力との接触へ導く。こうなると、その人間はトランス状態に陥るか、気狂い状態になるが、そのような状態の中で、天上の君主の玉座に上り、心の眼で超感覚的な世界が見えるようになる。そしてその個人によって啓示が与えられるが、それは人間の不完全な言語（乱語、驚語のようなもの）によって伝えられるから、理解されがたいものになる。

これが宗教共同体の中身であり、紅灯照も同様のものである。しかし、横浜発行の *Japan Mail* (*The Japan Weekly Mail* のこと) の記事、*The Associated Fists, The Society, which has caused the riots and led to war in China.* は、紅灯照を結婚の灯明の啓示であると解している。これは間違いだとして一近年ポール・コーエンもその著書 *History in Three Keys* で同じような解釈を示した一、次のように主張する。紅灯照は、

修道女たちの指導の下に、純粹に道教的な性質の瞑想とその性質の助けを借りて、靈との関係を持つ、あるいは接触する目的で、少女たちが神秘主義的に道教の体操に従事すること

であった、と。だから、「紅い灯火の光」という意味なのだが、「照」は道教の「内的に明るくなること、明晰」であり、「内的な光」、金丹を指しているのだと解釈する。そして、陰陽からなる金丹の陽は紅色をしていて、それを得ることで不死に至れる。だから「紅灯照」は、「賢者の石＝金丹による精神的な明晰化」というのがその意味なのだ、と主張する。

また、宗派のシンボルとなっていたのが、この紅い灯で、それは精神的使命のみならず、この世界を害悪から解放するための戦いの際に身につけていなければならないものだった。

II (大刀会、神拳、義和拳、大拳)

宗派は、嘉慶年間の蜂起の失敗後、打撃を受けつつも、至るところで自らの教えをばら撒き、四散した。在理教や大刀会がそれだが、大刀会は体操訓練によって剣術と筋力を発達させること一耍刀と把式一で知られた。加入者の多くは二十歳未満の若者で、指導者はある聖者の庇護者を選び出し、新しい共同体に宗教的な色合いを付与することにした。

ヨーロッパ人が別世界の超自然的な代表者のように思われ、また彼らがこの世界に害悪を持ち込み、中国の宗教と賢人を侮辱しているように思われ、それらと戦わねばならないと思われたから、なおのこと成功した。

この反外国人の雰囲気について、ルダコフは自らの経験を次のように語っている。一八九七年に私が北京の下町に住んでいたとき、何人かの素朴な下層民の代表者たちが私を悪霊だと真剣に見なし始めた。間もなく、近くの穀物市場での火事が、誰かによって、私の「魔法」のせいだとされた。この噂が住民の間に動揺を呼び起こした。夜毎に中庭に石が飛んでくるようになった。大きな丸石が農家の格子戸を破壊するまでになったので、このことを警察（衙門）に言うと、夜間監視が強化されて、異常な敵対行動は収まった、と。

この悪霊と戦うことは、人の手に負えることではない。そこで天からの助け、大勢の不死の人からの助け、が必要なのである。この不死の人（仙人）は現在は山中に隠れており、危機的なときに人類の助けとなるのである。海を越えてやってきた悪魔たちであるヨーロッパ人、その中に具現化されている悪霊の要素から天の王国（中国）を浄化しなければならない。しかしこれらの悪魔との戦いは、物質世界と超自然的世界（霊的な世界）とによって提供されたあらゆる手段によって準備されなくてはならない
〔筆者註：これが神拳、義和拳の武術の意味で

ある〕。

大刀会はこの思想を受け入れた。剣術と体操（耍刀と把式）は、この状況で、大衆宗教によって供された神聖なる芸術と見なされ始めた。そして神拳之事（すなわち、霊が体操に従事すること）と呼ばれるようになったのである。自分の威嚇的な性質を示すものとして、「大拳」とか、「義和拳」とかの名称を用いた。「大拳」は、団練を踏襲して、その軍事性と自由意志性を示すかのように、義和団、あるいは義和団練と名乗り始めた。

義和団の時期に、それ（大拳）は、何よりもキリスト教徒およびヨーロッパ文化の痕跡を持つものに対する死刑執行人になった。この仕事の中央委員会は山東省にあった。山東総団である。かれらは言語道断のような濃神的な言動をしているキリスト教徒に反対する檄文、掲帖、中傷文をばら撒きながら、そして、ここかしこで彼らの訓戒や預言、見せ掛けの奇跡を演じながら、あらゆるところに出没した。次に営口での見聞を記そう。

Ⅲ（営口での見聞）

ヨーロッパ人が滞在しているところにはどこでも、浮浪児たちが姿を現わしはじめた。露暦六月初（西暦では十三日早い中旬）にこうした旅行者が営口にも到着した。北部中国での騒ぎの噂が駆け廻っていたが、街を見知らぬ若者が歩き回り、交差点で武術の動作を試み、地面に

横になって奇妙な身振りをしたのち、トランス状態になって、

義和拳、紅灯照、一掃兇光（イーホーチュエン、ホンドンジャオ、イーサオクワン）

と、あるいは

天打天門開、地打地門開、如学天神会、我請師傳來。（テンダーテンメンカイ、ディダーディメンカイ、ルーシュエ テンシエンファイ、ウォチン シーフライ）。

と呪文を繰り返した。この意味は「大拳」の選ばれた者のみに知られていて、部外者には不明な神秘性を持ち、街の下層民の想像力は天地を指されて刺激された。そして、街の年老いた説教好きが、眼鏡をかけて団扇を振りながら、天地を引っくり返すような義和団の超自然的な力の説明を群衆に語り始めた。

理解不可能な動作をし、神秘的預言をする見知らぬ子供たちの出現そのものが、迷信深い中国人の想像力に影響を与えた。「おまえたちは誰だ。誰がこうしたことを教えたのだ」と、中国人たちは、私の眼前でこの不思議な新参者たちに尋ねた。「義和団です」と簡潔な答えが返ってくる。「誰も私たちにこうしたこと全てを教えてはいません。だけど老爺が私たちのところに現れて、しなくちやいけない、と言うのです。」

人々の前で子供たちはほとんど天の使いであるかのように振舞い表現して、宗派メンバーにとって望ましい気運が醸成された。それには関帝信仰が役立った。そして、少年と少女が高粱の細い桿で触れると、レールとあらゆる鉄が灰と化した、あるいは、神秘的な子供たちが紅布に乗って飛びまわり、悪魔が殺される、というような語りが流布した。子供たちの手にはナイフがあった。それは老爺（関帝）が悪い要素、つまりヨーロッパ人と戦うために持つようにと教えたのだった、と。

IV（組織、思想、儀式）

この宗派それ自体の構造について述べておく必要がある。それは乾門、坎門という二つの部門についてである。前者は黄色、後者は紅色で区別された。しかし、神霊に対して深々と叩頭することは共通したもので、地面に叩きつけるほどだったので、かれらの頭部には丸い禿が出来ていた。この叩頭の時には線香がたかれた。周囲の人々にも同じような熱心さと興奮が求められた。

この宗派の人々を支配している思想は、霊が自分たちの上に降臨するという確信であった。それは儀式を通じて達成されると信じられていた。超自然的な力と一体になることによって、義和団員は刀剣や火器、すべての武器から衛られる、と考えていた。

霊を呼び出す方法は二つあった。乾門では、

法師が咒を書いた紙片を燃やし、呪文を読み上げるときに、新信仰者は祭壇の前にうつ伏して早い呼吸をしながら齒をくいしばる。そのため、じきに口は泡で覆われる。これが霊が現れた印とされた。坎門では、候補者は叙聖されるためには跳躍を行わなくてはならなかった。その他は乾門と異ならない。「神々で満ちた」状況下での突発的な強い呼吸（氣）は、天の力の示現の前兆と考えられていた。儀式が成功するかどうかが重要で、儀式をした後に、助けてもらうために、神霊は、彼らによって呼び出すことができるのである。神霊との交信については、団員の錬度の深さによって違いがあった。

「大拳」は、天からの恩寵を受けるのに、二つの段階があると考えていた。最初の段階は「渾」で、濁っている、定まっていない段階である。第二段階は「清」で、完全に清められた、はっきりした段階である。「渾」は百日の訓練によって到達でき、その身体は刃や銃弾から護られる。「清」は四百日の訓練で得られ、空を飛べる能力が獲得できる、とした。

実際の軍事活動が始まると、かれらは自分たちの仲間の死を説明する必要に直面した。かれらはその死を、霊がその倫理性の点で汚しさがある者に入り込むのを拒否していたからだと言信じ込ませはじめた。だから、傷を受けた団員は非難に曝され、戦闘から無事に帰ってきた人は、とりわけ衣服が打ち抜かれていたときなどは、全面的な信頼を得て、高潔な人格だという

評判を得た。

儀式をおこない、預言のために霊を呼び出すのに壇が設けられた。そこでは祈祷のさいに、天の力、天佑が感じられた。それは道徳的純潔さで知られている選ばれた人物を通じてその意思を宣べた（神おろし・シャーマン）。それら（の霊媒）は何よりも子供たちだった。宗派員はその目的にかなった子供を選ぶために、歩き回った。要求を完全に満たす少年が見つかったときは、力づくでその少年を自分たちの根城に連れて行った。両親があらわれて反対したとしても、神がこの子を指名したのであり、これほど名誉ある選択に反抗できるのか、と宣告した。ほとんどの子供たちが宗派に引き入れられ、彼らは口に泡をつけて通りをぶらぶらして、手に武器を持って周囲を脅していた。これらが、ヨーロッパ人に対する暴力と掠奪行為の少し前に起きていた現象だった。この攻撃は判事の前で十分に分類された。（選ばれた攻撃対象は、）当地のキリスト教徒、ヨーロッパ人の召使、ビジネス上の関係者、ヨーロッパの言語・科学を学ぶ者、外国製品を売る者、である。第一のクラスは、「大悪魔」のヨーロッパ人、その次がその地の中国人キリスト教徒、その他の者は四番目その他に入れられた〔筆者註：大毛子、二毛子、三毛子、四毛子と呼んだことを指す〕。

宗派義和団のメンバーは問答で互いを見分けることが出来た。「誰が宗派義和団の教義を教えたのか」という問いに、「チャン・イーの町の南

方、山東省東昌県（府）に小さな村があり、その南に赤土の丘がある。その麓に三教の寺廟があり、その丘に八百歳になる人物がいて、かれが夢の中で紅燈老祖から教示を受けたのだ」と答えなければならない。答えがしどろもどろになった者は「黒団」（ニセ団）とみなされた。

義和団員はそれぞれ黄色の小さな紙片を身に着けていた。それには、「仏陀にも天使にも似ていない」像（かたち）が乱暴に描かれ、その周囲に神秘的な謎めいた言葉がいくつか乱雑に書かれていた〔筆者註：神咒符のことであろう〕。これらの言葉は戦場に出た際に、死んでいく義和団員が口元で歌っていたものである。

義和団の手に落ちた生贄の処罰方法は、ヨーロッパ人の観察者には直接には信じ難いものだった。その残酷さは動物の行動を思い出させる。

私は六月に営口で、山海関を越えて逃げてきたイギリス人から聞いた。彼によると、義和団は二人の宣教師を捕らえ、彼らの鼻、耳、唇を切り取り、指を切り落とし、刺し傷だらけにし、石の間に性器を挟んで碎き始めた。生贄が信じられないほどの苦痛に意識を失うと、かれらは眼を突き刺した。しかしそれでも彼らは満足せず、そのぐったりした身体を村中引き回した。下層民たちはそれらに泥をひっかけたり、それらで人体実験をしたりした。イギリス人の女性宣教師は捕らえられると強姦され、一連の苦痛を与えられた後、性器に赤く熱せられた鉄棒を突き刺され、最後にはそれが口に出てくるほど

までに突き刺されたのだ。この獣のような冷酷さは通常、ヨーロッパ人への殺人のすべてにともなったものであった。日本人杉山彬の死について言及しない訳にはいかない。かれは馬家堡（駅）の董福祥軍（甘肅軍）の兵士に捕らえられたのだが、目撃者によると、中国軍兵士が戦いに際しておこなう特有の軍事的儀礼が行なわれて、一連の拷問が加えられた後、生贄は心臓を破りとられた。そして心臓はビクビクしながら、粗野な戦士が叩頭するなか、地に立てられた槍の根元に向けて引っくり返された。儀式が執り行われた後、心臓おぼろばらに引き裂かれ、その場で兵士によって食われてしまった。このことは時として戦場においても実践されることだった。その戦場では、中国人の兵士、この生まれながらの野蛮人が倒れた敵から心臓を切り取って、それをやることによって勇氣と敵に対する優位を得られるという確信を持って、それらを食っているのである。

復讐者のこうした乱暴な迫害から誰も救われなかった。かつて宗派に加わったが、何らかの理由でそれから離れた「黒団」の者さえ逃れ得なかった。

生贄が義和団のサークルにもたらされたときに、臆病からか、あるいは同情心からかでも、それへの一撃を遅らせることは小心と見なされた。判決は神の賛歌によって下された。この神は自分の意志を伝え、あるいは占いで被告人の有罪性を教示した。霊の全知は死刑執行人のそ

のサークルを越えるものではなく、そこでの決定は、フランス大革命中の裁判所がそうであったように、まったく同じものであった。すなわち、「殺（シャー）」の一語であった。

秘密結社の思想が宗派に持ち込まれ、他の非政治的な会にも定着したのだが、紅灯照もそうしたものである。キリスト教との戦いにむけて処女の結社を設立する際、義和団の初老の女性が代表となっていた。聖なる女性戦士には宗教共同体の処女が狙われた。この指導者に委ねられている女の子が、靈感を受けた預言者の役割を演じ、その子供らしい手の合図で、義和団員たちを死の抱擁へと投げこむことが出来たのだが、そのとき、彼女たちも集会から忽然と姿を消すのだった。

紅灯照の叙聖方法も簡単なものだった。隔離された御堂、あるいは修道院に祭壇が設立されると、近隣から少女たちが連れてこられる。壇の前には線香が焚かれており、修行者は手に紅いハンカチを持って、指導者とともに清水の大杯の周りを、「飛（フェイ）」、「飛（フェイ）」と絶え間なく繰り返しつつ廻る。叙任と教示が終わると、指導者は年長の女の子を選んで、受信者として、その共同体に戻っていった。

各メンバーは壁にかけた紅い灯明によって集会におけるその存在を標示していた。入り口の灯かりの数は新たな帰依者の数を示していた。その一つが消えたら、それはその所有者が技術的完成の域に達し、賢者の石（金丹）を得て、

未曾有の旅行へ世界に旅立ったことを意味していた。その力は義和団の兄弟よりも強大なものだった。それはヨーロッパ人の租界を手の指で指し示すことで焼き、自由に空を飛び、「海を越えてやってきた悪魔の巢」、アメリカとヨーロッパに死と火事をばら撒くことができた。これは悪魔と天使の宗教戦争であり、その悪霊は道教神話の多くの不死の存在（仙）の助けを得た若い処女によって粉碎されねばならなかった。そこには苦行と佛教的隣人愛と殺人とが共存している。しかし人が殺されるのではない。人類を汚し、高価な織物に泥を塗る悪の要素が粉碎されるのである。一体どのような宗教が、このような悪い敵との神聖な戦いへの高貴な使命を祝福しないものがあるうか。

紅灯照の女の子の戦士が空を飛んでいるのを見た者は誰も無かった。それにもかかわらず、彼女たちの権威を引き裂くことは無かった。「飛ぶ」ことになっている少女たちは、トランス状態に陥って身動き一つせず、時として数日にわたって音も立てず、筋肉一つ動かさず、手足を伸ばして横たわっていた。神聖な少女は自らの肉体的外殻を残したまま、どこか外国へ飛んでいってしまって、そこでヨーロッパ人たちを殲滅している、あるいは戦場で義和団を助けているのだ、という確信を作り上げていた。

V（義和団の文献と呪術）

神秘主義的宗派、とりわけ義和団の文献につ

いて叙べないのは不充分だが、ヨーロッパ人は大拳の思想が広まり始めた発生源において、つまり直隸・山東において、それを研究するのに都合の良い機会を逃してきた。われわれは北満洲においてそれを行なっていたが、それは南部の激起の鈍い反響で、政府によって強制的にあてがわれたものだった。

その宗派の信徒の文献は結局のところ、邪術・魔術の方法の記述に帰着する。これによって占い、霊が呼び出され、病気を治し、魔法をかけられて従順になるのである。魔法をかける際の手の動き（訣）、呪文、符は、超自然界の助けで実地的な結果を得るために重要な要素である。

超自然界と連接する役目を負っているのは道士、扶鸞、跳神などである。

扶鸞は中国の各都市で見ることができる。これはわれわれのいう妖術使いのようなものである。それは二人の子供が、垂直に筆がつけられている棒の両端を持ち、その下に砂を撒いた大皿が置かれている。呪文を唱えると、しばらくして筆の末端が自然に震え始め、砂上に文字を書き始める。これらの文字から一連の句がかたちづくられ、それが質問者の答えになっているのである。こうした天からの啓示は妖術使いの知性によって制限されており、その奇跡の度合いもペテン師の巧妙さ、要領次第というわけだ。

扶鸞と並んで焼香婦人などの占いや治療を行なう初老の女性がいる。彼女らの預言は、線香

に火を点して、手を動かし始め、時期に合った秘伝の符を見ながら呪文を唱える。しばらくすると狂乱状態になり、彼女の口から支離滅裂な言葉が発せられるが、その場の人々によって注意深く聞かれる。そしてその神の庇護によって解釈し、意味を見出そうと努める。同様にして悪魔も、人家から追い出す。病気の治療には、線香、茶葉、紅棗の三つを使用する。

中国の迷信によって、そこから社会の宗教的指導者が集められるような枠組みというのは、このようなものである。こうしたものに重要な役割を果たしているのが、秘密の学問の知識を身につけた道士や方士とその作品で、かれらの作成した文献の代表的なものに、『焼餅歌』と『推背図』がある。これは前者の「符」に唐代の袁天罡がコメントをつけたことで、互いを補う形で統合するようになったのだった。また『萬法帰宗』がある。

政府によって禁書にされた文献はこうしたものにとどまらない。戊戌のクーデタ後、康有為の共謀者たちの家の家宅捜索が行なわれたが、そこからも一連の蔵書、秘密結社の思想も含む蔵書が見つかった。哥老、英雄、互助などの反王朝結社で、これらの高官が秘密結社の指導者と交わした手紙も押収された。それでもって反政府宣伝の事実を確立して、何人かを処刑にした。そしてこれらの書物は紫禁城の壁内で数日間かけて焼かれたのだった。

こうした文献は二つに分けられる。第一は、

『焼餅歌』『推背図』『萬法帰宗』などの秘密結社の教義や儀式について書かれた文献である。

これらは公衆には良く知られていないが、第二の、住民の間に宗派の思想を普及させるために用意された作品がある。これらは散文や詩の形で読み上げられた預言、檄文、咒文のかたちになっている。それらは、中国人の世界観の迷信の琴線にこれ以上ないほどよく働きかけるような、内容の極端な不明瞭さが特徴である。

こうした預言については、一八九八年に、私は北京で、中南海でつぎのような銘の碑文が掘り出されたという話を聞いた。

快馬三條腿、可恨市街嘴、萬壽止乙未、無橋黃河水、這時不算苦、二四加一五、萬街紅燈照、那時纔算苦。

〔三本足の駿馬が来るときに、街の宗派が憤激を引き起こすだろう。皇帝たちの寿命も乙未の年に終わり、黄河をわたる橋はないだろう。今の時代を苦しく思うな。二つの四と一つの五で表されるとき（筆者註：ルダコフは知らなかったらしいが、「八月十五日殺韃子」の時のこと）、すべての街を紅燈が照らすだろう。そのときこそが本当につらくなる時なのだ。〕

この碑文の横には「劉伯温記」と書かれてあった。劉伯温とは明の太祖（朱元璋）の大臣である。碑の偽作者は予想される激変の予言は十

四世紀に遡っているのだと公衆に納得させたかったのである。

三年前に私は何人かの中国人からもう一つの到来する事件についての預言を聞いた。

北京近郊の盧溝橋の南西に数里はなれたところに、肥城という古い都市がある。伝承によると、その名称は、明王朝以前に生きていた文天祥という高官によって門につけられたという。その門の名称の特徴は中国の歴史上続いた時代（王朝名）を示していることだ。例えば南門は洪武と名づけられた。南方から来た明王朝の最初の皇帝の年の名である。東門は、満洲王朝の創始者である太宗の治世の名、東方にあらわれた順治の名である。北門は砂にまみれていて門にある銘が見えない。土地の人々は、それ太極門であると信じており、王朝の崩壊を預言しているのだと言う。秘密結社の手先たちは当時この名称に、宗派八卦会（八卦教）を示すものを見出した。つまり、この宗派のシンボルになっていたのが太極という「最高原理」だったからである。この宗派（八卦教）は、一連の他の秘密結社と並んで、時代を為してきたのだが、満洲家の独立治世をいずれにせよ終わらせるであろう。その際には、雷雨が北方からもたらされるであろう……と。

〔筆者註：明以前の唐代の文天祥が、明朝

清朝と続くことを預言し、その次は「太極」派が王朝を開くだろうと預言している、という意味である。八卦教の影を嗅ぎつけているのは極めていいセンスである。]

「大拳」の宣伝ビラの検証に戻ると、義和団文献のこうした例の多くは公衆によく知られており、そのうちの幾つかはわれわれの『東方研究所会報』に載せられているが、興味深い一つを紹介しよう。それは、宗派の、「外国人が原因

となっている害悪」から逃れたいと願う者が守らねばならぬ幾つかの儀式について指摘していること、第二に、この文書を寿山（黒龍江將軍）・長順（吉林將軍）の命で、北満州で公表したということは、ロシアに対する敵対行動につながる一連の現象の一つであったという事実によって、その意義が増大しているということ、である。（そのビラとは、つぎの）「山東総団伝出」である。

山東総団伝出

洪鈞老祖降壇諭年年有七月七日牛郎会親之日此夜家中老幼不論男女全要紅布包頭燈燭不止向東南方三遍叩首上香一夜不許安眠如若不為牛郎神仙不能下降救衆人之難伝到十五日亦為此自八月初一日至十五日衆人不許飲酒如若飲酒一家大小老幼必受洋人之害九月初一日初九日必將洋人剪草除根以上七月初七日十五日九月初一日初九日衆人不許動烟火如若不遵閉不住洋人火炮千萬千萬誠信至十五日

衆神仙歸洞又

関帝聖君降壇諭今年人死七分叩求

觀世音菩薩大發慈悲可免此災伝一張免一身之災伝三張免一家之災見者不伝若説謊言天神震怒必遭重災為善者可免不信者難逃但看七八月之間人死無數每於鷄鳴時遍察人間善惡衆人務必於六月十九日七月二十六日向正南方虔心焚香上素供可免大災又呂祖降壇諭於六月七月八月九月天降大熱奇災須用鮮姜三片黑豆花椒各二十一粒用紅布口袋裝上縫好在衣衿之内不論男女老少均帶之為要再用青布口袋將前味三藥裝上縫好放在水缸之内希請仁人君子見而信之母要知若妄聞敬謹伝送 由盛京伝来

〔訳文は、前著『義和団の起源とその運動』（研文出版、1999）で類似の掲帖を訳しておいたので省略する。『義和団档案史料』（中華書局、1979）の巻頭写真にこの伝単「山東総団伝出」が既出している。北京天津地区で出されたこの伝単に、関帝、観世音菩薩、呂祖の降壇諭を加えたものと考えてよい。これは北満洲で見つかったもので、盛京副都統の晋昌らが支持した奉天（盛京）の義和団から出たことがわかる。〕

天師神表身、誦速伝、如敢褻瀆、定遭天譴、切慎。其文曰、

庚子義和団 戊寅紅燈照 丙申送来風 甲子必来到
 壬申不苦処 二四加一五 遍地紅燈照 壬申到庚午
 乙酉是双月 庚子纔算苦 等到龍字虎 神迫鬼又叫
 六月十七日七月二十八日身著紅布而向東南焚香祭之見
 字速伝不可胡言

板存ト魁西城毫人和泰刻字局

〔これは初出の掲帖だが、ルダコフはこれを『天上の師チャン・シー／天師のビラ』として、「この布告を歌うように読んだら、これを他の人々に急いで伝えよ。あえてこれを敬わずに扱えば、天は汝を罰するであろう。十分注意せよ」と解釈し記している。以下に訳文を挙げておく。〕

天師神が身を現した。誦んだら速やかに伝えよ。もし敢えて褻瀆するときは、天の譴責がある。切に慎め。その文は次のように言う。庚子の年（一九〇〇年）は義和団、戊寅の年は紅燈照なり。丙申には風を送り来り、甲子に必ず到る。壬申の年は苦しくない、八月十五日になると、遍く地を紅燈が照らす、壬申の年から庚午の年までだ。乙酉の年は閏月がある、庚子の年こそ苦しいのだ。龍虎を待ち、神が迫って鬼子が叫ぶことになる。六月十七日、七月二十八日には身に紅布を着け、東南に向かって線香を焚いて、これを祭れ。この字を見て速かに伝えよ。でたらめを言ってはならない。板木はト魁西城毫人和泰刻字局にある。

こうした意味の無い詩からなっているのがまさにその宣伝ビラなのである。

さて次は「中国政府の動機と傾向」である。

VI（基督教布教問題と政府の義和団取り込み）

山東に始まった人民の動きは電流のように広まったが、政府は受動的にとどまろうとしなかった。自分の弱さと不安定さを意識していたから、「中国人のための中国」という思想を唱導する保守党〔筆者註：逆に言えば、革新党は「外

国人のための中国」を唱えたということになる
う]の名前でカモフラージュしつつ、その結社
を自らの支配下に置き、国家の高官の指揮の下
での政府組織にする、というより他に良い方法
を見つけられなかった。

国家の代表者が結社に接近したのは、かなり
の確率をもって、大沽の占領よりも前の時期だ
ったと推定しうる。それは公使館攻撃が西太后
の命令によるものであることを示す中国の原本
書類から明らかである。この時期から、帝国の
法によって裁可され、「国家の母」の保護を受け
た完全な機関になったのである。

勿論、宗派に対する恐怖のみで朝廷がその前
に屈したのではない。もっと別の深刻な原因が
あった。義和団員の出現は時代の兆候であり、
中国人・西欧人が果たしていた、中国の歴史・
日常生活の現象の全総体から導き出された必然
的な数学的結論であった。そのため、東洋と西
洋との二つの文化の戦いが現われたのだ。

孤立していた中国は、ヨーロッパ文化の脈拍
の振動と衝撃を蒙って、逃れることができなか
った。それは汽船のスクリューとともに大河に
入り、蒸気機関の汽笛が満洲の密林に響いた。

平和な生活の中で二つの文化が接触した主要
な衝動のうちの一つは、キリスト教の普及であ
った。英仏の大砲によって、一八五八年に、中
国に宗教的自由が導入された。キリスト教は領
事の保護の下に、他の宗教との間で特権的地位
を占めた。欧米の金銭の援助によって多くの地

域に及んだ。(中国のキリスト教は、)ヨーロッ
パにおけるキリスト教(正教、カトリック、新
教)の鍛え抜かれた歴史とは異なって、その固
有でない土壌に人工的に育て上げられたもので、
西洋からの心配りが無いと、いつなるとき枯れ
かねない異国の植物である。諸協定によって欧
米から中国へさまざまな疑わしい要素が進入す
る可能性が開かれた。伝道者という名称に隠れ
て利己的な目的を追求した者が多かった。もち
ろん高潔な宣教師もいたが。

キリスト教の宣教師団は、莫大な資金を持っ
ていた。最初、中国の腐敗分子の人物たちの注
目を彼らに向けさせた。彼らは生活手段を容易
に得られることを願い、洗礼者の質よりも量を
気にしていた宣教師たちの金銭的恵みに誘惑さ
れて、内的確信によってではなく、純粋に利己
的な目的から、新宗教を受け入れた。宣教師は
改宗者に金銭的援助を与えて、誰でも区別無く
信徒衆に受け入れた。信徒衆はというと、宗教
儀式を覚え、基礎教義には冷淡な態度を取っ
ていたが、指導者の前では猫かぶりして、宣教師
の視野の外では、自分の収入を増やすために禁
じられた手段を用いて、今までと同じ生活様式
を送りつづけた。彼らは、無関係な人の前では、
宣教師は搾取の対象以外の何者でもないと言
っていた。キリスト教の受容に大いに頼ってい
たのは、犯罪者だった。宣教師団の強い擁護を
期待して、ヨーロッパ人の住居の向こう側に逃
れることがよくあった。このような事実は勤勉

な中国人の目には、キリスト教共同体の活動の信頼を大きく損ねた。中国人のキリスト教徒は不信と嫌悪の対象になった。愛と献身的な態度を持った高潔なキリスト教徒の人物たちも例外ではなく、合理主義の儒教者には全く理解されなかったからだ。こうして、中国では、まともな人間はけっしてキリスト教徒にならない、という確信が作り上げられ、より強くなった。キリスト教の高潔な側面（博愛）は、養老院、孤児院などに実現されていたが、偏見を持った中国人の想像においては全く異なる色合いで、墮落した罪深いもの、すなわち、呪術的目的を持ったものと解釈された。中国でありふれた犯罪は、キリスト教徒を共犯者にしようとし、下層民・知識人はさまざまな犯罪を、「ヨーロッパの宗派」のせいにしようとしたし、人を生贄にして魔法を行なう（眼球を取る、回春薬を作る等）というデマを流していた。

中国の知識人はこれらが偽りだと感じていたが、問題を検証して正しい処置を取るかわりに、やはり中国人の精神的な特徴で、かなりの偏見を持ってこれを出迎えた。そしてキリスト教と在地文化の衝突の多発で、最初の見方（偏見）は変えることができないものだと納得させられたのだ。中国の政権も、自らの勢力圏内に害悪があるときことを感じ始めた。しかしこの問題は、協定によって多くの有効手段をもつヨーロッパ列強の代表との交渉が控えており、喉に骨がひっかかっても、直接取り出せないような状

況におかれていたのだった。

その一方、西洋は自らの文明を携えて東洋へと止め処もなく進みつづけていた。中国には、心の中に嫌悪を秘めながら、年を追うごとに要求がますます大きくなっていく客人を受け入れるほか、方法は残っていなかった。西洋諸国は、中国人の身体と精神をアヘンによって墮落させ、港に住み、さまざまな利権を要求し、自らの影響圏を確立した。中国は、彼ら全てを追い払おうと考えつつも、客人を迎える魅惑的な笑みを浮かべて作輯（前手を組んで挨拶するしぐさ）をする官員に倣っていた。

にもかかわらず、中国は歴史的伝統と、東アジアにおける文明普及者の役割に誇りを持っており、自分の卑小さを認めて、戦いをあきらめようとは思っていなかった。公然たる戦いは危険だったから、中国政府の一連の非合法的な活動が始まっていた。反キリスト教の一連の出版物、キリスト教を非難している皇帝説諭、煽動的な図画や、誹謗文、下層民の騒動、宣教師団の破壊、欧米人・中国人キリスト教徒への殴打などがそれである。扇動者、秘密結社は、戦いを大きな声の標語で告げていた。

このケースで、中国政府—それは、国民生活のあらゆる中心からの光が屈折する中心点だった—が、なぜ、結社義和拳の考え方がその酵母になっていたような人民の新たな動揺を迎え入れるようになったかは、いまでは理解できる。しかしなぜ、政府は公然とその側に立たなかつ

たのだろうか。次の公式文書を挙げよう[「軍機処寄盛京將軍増祺等上諭」で、『義和団档案史料』上、360 頁に収められている文献であるが、ルダコフの訳は必ずしも正確でないので、中国語原文をルダコフの論旨に沿って訳すると以下のようになる]。

増祺、長順、寿山、晋昌宛……

六月二十六日の上諭を奉じた。いまや中国と外国の戦端が開かれたが、将来の収束時のために籌計をしておかなければならない。長順が前奏したように、ロシア人の鉄道監工員は敵、伝教国とは涉りが無いのは明らかだ。いま奉天で鉄道破壊がおきているが、これは拳民の仕業である。要するに、疆土を保守することが第一で、もし大兵が直入するようなことがあれば、極力抵禦しなければならぬ。このたび開戦になったのは、本より拳民のせいである。拳民が先ず鉄道を毀したのだが、われわれは弾圧し切れなかった姿勢をつくり、その戦端はわれわれから開いたのではないことを明らかにすべきである。戦いあるときは、拳民を前駆とし、われわれは旗印を掲げる必要はない。そのほうが将来いろいろと図るときに妨げがない。

このようにして、中国政府は「自ら旗印をひろげる」ことはせずに、後の活動余地を残しつ

つ、大拳の背中に隠れることを選んだ。さらに話を先に進めれば、この結社は国家機関に変化した。それは、「天子」の権力の庇護の下に、巨大な木のように、中国全体にその陰を広げた。だが同時に、それは秘密の覆いによってヨーロッパの眼には隠れていた。

残念ながら、中国政府の大拳に対する態度について正確に示せるような原本文書はないが、私がチチハルの黒龍江省衙門で見つけた文書および類似文書で次のことは明らかである。大拳の新しい（国家）機関への布石は北京において女帝（西太后）によって置かれたということ、大拳の大軍が正式に手続きをとられて正規の組織にされたということ、そして拡大したのである。六月までに、義和団員のいない町や村はないようになった、と目撃者は言う。中国東北部全体が収容所になった。青年はヨーロッパ人を絶滅させるさまざまな宣伝ビラや「大拳」の天の使いの話に煽られ、官吏の勧めで、義和団の神秘主義的な体操の訓練を受け、自らの団体の神聖性を信念にして、「海を超えてやってきた悪魔」との戦いに、今かと突進しようとしていた。預言によると、悪魔には最期の時が打たれるはずであった。

誰もの精神が高揚していたこの時期には、正規軍さえそれを習練した。多くの兵營に壇が設けられるようになった。兵士たちは口に泡を浮かべながら身体を動かした後、神聖な霊が降りてきたことを確信して、迷信的宗教儀式的訓練

所を修了した。狂信的な法師が熱心に説教をおこなった。それで、啓示と預言によって、海から来たよそ者に対する怒りと嫌悪の激発を呼び起こし、外国人との戦いに向けて連隊を奮起させた。甘肅軍司令官の董福祥は、祭壇が皇帝の宮殿の黄色の屋根の下に現われると、大軍を率いて宗派に味方した。かれは「海を越えてやってきた悪魔」への永久の憎しみを誓った。

端郡王(載漪)が運動の首領に任命されると、彼の邸は義和団の裁判所となった。法師の言葉によって何百という犠牲者が高台に乗せられた。

天津戦、公使館包囲の戦いの間も、中央政府は覆面を取らず、九門の城壁の中から戦争と政治のチェスの手を指導しながら、沈黙し続けた。

最後に、満洲人にとっても、積極的な参加をする順番がやってきた。盛京(奉天)が兵士たちの先頭になることになった。その戦争の最初の犠牲者になったのは奉天のカトリック宣教師たちだった。ここではロシア人も耐えなければならなかった。

六月二十七日、皇帝令で盛京の「大拳」指揮者に、戸部正堂の清銳、刑部正堂の溥頤が任命され、將軍増祺らと協力して行動、指揮するように委ねられた。しかしその前の六月二日に、「欽命幫辦奉天軍務大臣関防」、つまり將軍の下
の軍隊の指揮官に任命されたのは副都統の晋昌であった。

この時期の南満洲の緊迫した状況は清銳らの報告によく描かれている。それは次のように言

う[のちに『義和団档案史料』上、321頁に収められた「光緒二十六年六月二十日盛京戸部侍郎清銳等摺」]。

六月十八日に將軍増祺の咨開で、軍機大臣字寄の六月十四日上諭を受け取りました。

それには、清銳等が奏するに、奉天省拳民がフランスの洋楼(カトリック教会)を焚毀したことがあった、現在はずでに各国と開衅かんせんしており、奉天地方は緊要であるから、自らうまく防範をなすべきである、そのため清銳と溥頤に義和団訓練大臣を命ずる、將軍増祺、府尹玉恒と会同して処理し、一切の軍事は副都統の晋昌とともにばかり、遷延して機を誤まるなかれ、六百里をもって諭す、とありました。

伏して思いますに、奴才らは愚陋きわまりないもので、軍事を知りません。東三省は公に従い、すでに困難に耐えて邁進する様子を形しておりますが、ここに再び特詔をうけ、天より命を聞き感漸無地の思いです。中国と外国が開衅かんせんせる折、義和団訓練は最も急務で、責任はいよいよ重く難いものがあります。しかしこの神人ともに憤れる秋、血誠を尽くすのみです。なすべき各件は旨に遵いて、増祺、玉恒と会同し、戦争については晋昌と心をつくして籌ります。

このようにして、六月十四日付命令によって

結社義和団の政府への従属が確立された。官吏は、宗派メンバーを最初に彼らが目的としていた革命に対する希求からそらし、この不穏な要素を他に、それに劣らず不安定な道に向ける以外に解決策を見つけられなかった。さらに官吏たちは、彼らを鼓舞する必要性を感じた。義和団員は北京朝廷の忠実な僕の掌握下に置かれて、このときから、東洋の専制政治への献身的な犠牲となり、何千もの生命で自らの誤解への報いを受けるために、西太后とその手先の忠実な道具となったのである。

この制度が始まると、正式な印の必要性が生じた。「管理義和団鍊大臣印」である。このことは六月二十日に上奏し七月三日に皇帝の裁可を受けた。新印の使用開始は六月二十五日に決められた。この時から義和団鍊を秘密結社と見なすことは間違ったことになる。大拳組織は国家機関という位にまで昇進した。

VII (南満洲の「大拳」)

義和団鍊大臣の最初の仕事は、この革命的な徒党を政府に対して献身的な僕に再組織することであった。これは南満洲では南から来た義和団員が極めて少数であった状況で、容易になった。その地区では全員の兵役義務のようなものが導入され、宗教秘儀へ参加するとともに、軍事操鍊を学ばされた。

その基礎は保甲システムだった。それで、「礼字団」「義字団」というようなものを作った。ど

の程度政府がこれらの部隊に物資、資金を供給したのかについては正確なデータは持っていないが、チチハルの義和団鍊の事務部の書類から見定める可能性が出てきた。それから見ると、遼東における支出は以前に比べるとはるかに大きい。

政府が義和団に支給した武器は剣(腰刀)と槍であった。この武器には超自然的な意味が滲せられ、呪文を唱えると、霊によって恵まれた神聖な炎で全てを焼き払った。また赤または黄色の制服があった。そのほかに、粉、米、銅貨が与えられた。北部満洲では粉一フント(四百九グラム)、一碗の米、百五十京銭が支給された。

参加したのは少年たちで、壇の多くは関帝廟などに設けられ、武術訓練とともに官吏も参加して祈祷がおこなわれた。壇ではしばしば降霊がなされた。ヨーロッパ人のなかに具現化している悪い原理から世界を解放するために、霊が人々の間に現われる時がやってくると深く信じていたので、中国の知識人と政府自身も人々の動きの全体の波に呑み込まれ、宗派の秘儀に積極的に参加した。われわれは七月二十八日付の増祺のチチハル将軍(寿山)宛の電報を持っているが、そこには済仙の霊の義和団への賛辞が含まれている。以下がその内容である。

盛京のジン・ジュンが済仙の霊に義和団の訓練に従事すべきであろうか、と質問した。それに次のような答えが得られた。

和団一事真妙妙	義和団のなすことは真にすばらしい
八月十才纔知道	それについては八月二十日に汝は知るであろう
若問機事申時安	もし機事を問うなら、申の時こそ安し
洋人南北鬧鬧鬧	洋人は南でも北でも騒ぎを起している
好道真好道	すばらしい真にすばらしい道である
小兒紅燈照	小児も紅燈照に入る
心誠丹也成	心が誠なら丹も成る
二四七哭号	二、四、七（八月十五日）には哭き叫ぶだろう

その預言の不可解さはデルフィの神託をはるかに上回るものだった。それは八つの無意味な句を預言していた。それは押韻で繋がっているのだが、好き勝手に解釈している。平民と官吏の知性をともに縛りつけている全般的な迷信のためにこれらに畏敬の念をもって接することに	なった。 増祺は夏にその無秩序さに不安を覚え、満洲から出てしまいたいと考えていた。かれはその祈祷の折に、超自然的な力に自らの戸惑いの解決を求めて質問したのであった。霊は次のように答えた。
---	--

子年方知不平安	庚子の年はまさに平安ならざるを汝は知っておろう
爾人肯豈離家園	どうして汝は家園を出て離れることが出来ようか？
心安心息行孝母	心を安め落ち着かせて、孝母を行なえ
父恋兒孫難放寬	父は兒孫が可愛く、放って置き難いものだ
我若行孝	われが孝行をおこなうときは
不怕槍礮	鉄砲も怖れない
鬼神欽敬	鬼神も飲んで敬う
金丹大道	金丹の大道なのだ
爾和弟兄	汝と兄弟たちは

不必遷榮	別れてはならぬ
洋人雖乱	洋人が乱しているとはいへ
神聖掃平	神聖が平らげるであろう
只恋嬰兒子女	ただひたすら嬰兒子女をおもえ
不顧年老父母	年老いた父母を顧みないのであれば
人爾移住深山	汝がたとえ深山に移ったとしても
難免刀兵之苦	刀兵の苦しみは免れ難い
回頭孝父母	考えを改め、父母に孝行をつくせ
先免刀兵苦	さすれば、先ず刀兵の苦を免れる
奉親與恋兒	親につくし、子供らを愛せよ
災禍転為福	さすれば、禍転じて福となろう
七月初三日濟仙降壇云	七月三日濟仙が壇に降りて云う

[ルダコフの詩文解釈には幾つかの点で不十分な点があるので、訳文は訂正した。]

「大拳」を新たに組織する際も、その根本原則とその神秘主義的性格はそのまま保存された。宗派の持つこの意義が、天子・「国家の母（西太后）」の保護を得させ、中国の宗教と思想の痕跡を残すものすべてを、義和団の持つ宗教的権威に隷属させた。中国の原則を擁護する新たな神聖な戦士が現われたところではどこでも、最高位の官吏から最下位の苦力まで、住民はすぐに神秘主義政治思想の強力な影響を受けたのであった。

誰が、西洋に対するこの新しい十字軍において宗教的指導者だったのだろうか。役人も政府も新しい思想の主権者にはなれなかった。道教の僧侶の世界（民間宗教の世界）から預言者が現われた。かれらは中国の神秘主義的で哲学的

な世界観の土壌で熟した宗教的原理の代表者であった。扶鸞、跳神などといった道士として何万という人々がいる。彼らの人心に対する影響力は想像以上にはるかに大きいのである。宗教的原理の土壌における人々の熱情が突発するたびに、道士や他の僧侶たち、そして民族的で宗教的な信仰に仕える者たちが、彼らを脅かす道徳的で物理的な害悪に対抗する集団の指導者として、真つ先の役割を果たすことになるというのは疑いない。義和団もこの法則の例外ではなかった。

「大拳」の長になったのは、いわゆる「魔術の師」＝法師、あるいは傳師であった。かれらの意義は宗教指導者と同様に政府によって認められていた。

法師はいく種類かに分けられる。登壇大法師は、宗派の全宗教秘儀における主要な指導的役割を果たす。それにつづくのが、中法師、下法師、主壇師などであった。その活動の詳細は、義和団の共同体の儀式と宗教生活に関するわれわれの次の論文で伝えられるであろう〔筆者註：これが出版されたのかどうかは不明〕。

誰かが、気に入った者の中からこの「魔術の師」を選び出すことはできなかった。師傅は、この宗派が天にその出自を持つことを証明するために、礼拝の勤めの時に、霊が降りてきたその人物であった。かれらの権威は瞬間に迷信深いすべての人々の心にすぐに認められた。そして人々は師傅の合図に従って勝利を望んで忠実な死へと歩んでいったのである。

しかしなぜ中国政府は、自分の手先の中から、かかる指導者の任命権を横取りしなかったのだろうか。そうしたならば、大衆の中で多くを失っただろうし、信頼を減少させたであろう。実際、官吏たちは、何もせずぶらぶらしている下層民をそこかしこで集め、かれらの半ば野蛮な本能を呼び起こして攻撃させるのを上手くやったのかも知れない。しかしそれなら、かれらの団結はすぐに瓦解し再団結させられないだろう。下層民の集団の心理はきわめて単純である。弱い敵に対するこの上ない図々しさと厚かましさであるが、それは強敵に直面すると臆病になるのだ。しかしわれわれは今の動きのなかに異なるものを見ている。ここで人々をひどく驚かせ

るのは、いかなる犠牲を前にしても立ち止まることのない並々ならぬ粘り強さと、ヨーロッパの軍隊との衝突に際して、不成功だったにもかかわらず、変わることのなかった自分たちの不死身（неуязвимость）と勝利への確固不動の確信である。集団はほとんど裸の手で敵に向かって行き、人的犠牲をとまなう虐殺がなされて、ようやく敗走することがよくあった。しかしかれらは、軍隊が近づくと、高粱や木々の間、農家の廃屋から敵を攻撃し、その銃剣と爆薬に曝されてはじめて戦闘を止めるのだった。

ここで前面に出ているのは、狂信、つまり思想への盲目的な奉仕である。このような現象は、天からの使者としての指導者の評判が全員から疑われておらず、人民の集団の意識の中で、降ったばかりの雪のように非の打ち所のないほど綺麗である時に限って考え得るものだ。祈祷のときに降霊で師傅が現われることで、霊の啓示によって、天みずからが新しい指導者を遣わしたのだ、と確信した。他の神秘主義、宗教的な一連の現象とともに、人々は義和団が神であるということを納得するのであった。私がインテリ層の代表的な人々から何度となく聞いたように、義和団員のなかには、その眼に見えぬ援助をみなに与えている不死の者たち（仙）がいるに違いないのだった。すでに述べたように、霊が降りてきて、人々は不死身になるのだが、「大拳」と衝突する際、不思議なことに、どんな敵も自らの武器で打撃を受けるのだった。義和団

員の全部隊の長としてロバに乗ってくるのが、手に紅い灯明を持った小さな女の子であった、という様子をしばしば見る事ができた。この不幸な子は、自分の神聖な使命と不死の確信があったから、ヨーロッパ人の兵士と会った、その少女の意味を知っている敵の狙撃を受けるのだが、初めに戦闘に向うのだった。このようにして罪のない、自分の無分別と、指導者の搾取の犠牲者がどれだけ倒れたことであろうか。

政府自体は、宗派指導者たちへの統制のみを確立し、大衆を脇にそらす責任を負わせ、それで同盟者を得るということをよく認識していた。そのため、法師の第一の任務は、信徒に対し、外国人に対する嫌悪という原則にもとづいた教育を行なうこと、儀式の監督、神託に従事することだった。神託の預言は、ヨーロッパ人を敵としたさまざまな檄文となり、宣伝ビラとして普及した。その際、官吏が大きな役割を果たした。例えば、チチハルでは、穏やかな將軍の寿山が、チチハルで印刷された山東の結社のビラ（「山東総団伝出」のような）を貼れと命令を出した。

師傅たちの神々への信仰は、中国人の知識人の間においても非常に強かったので、中国政権は深刻な危機の時はいつでも、かれらの援助を求めた。黒龍江の最高権力が、ロシア軍と衝突した時の軍事的敗北の時に、かれらの援助を求めたことはよく知られている。

補足として次のことをあげる。義和団は各地

でそれぞれ壇を置いた。先頭に立ったのは法師だったが、彼らは、総壇に属していた。それは地方の（中心）都市にあり、「大拳」の最高宗教裁判所であった。「総壇」は、その神聖な指導者、つまり登壇大法師や他の指導者において、義和団の最高の真理の萌芽をその神秘の内に保持しながら、共同体の内的精神生活を代表するものだった。これら全ての機関は、天子の機関から賜った印を持っていた。われわれはここに奉天のある壇の印の一つを載せることにする。印の字は、『欽命 奉天義和神拳総壇各團處所』というものである（これはP.P. グロデコフ將軍—満洲侵攻軍司令官の一人—によって東方研究所博物館に贈物として送られたものである）。

「大拳」の新機関化についての報告を終えて、奉天の高官たちのその後の活動の概観に移ることにしよう。（入手した）文書にもとづいて、かれらの意中を明らかにし、後の叙述にとりかかろう。[ここでルダコフは、前掲の『義和団档案史料』上、322頁に収められている「光緒二十六年六月二十日盛京戸部侍郎清銳等摺」の「又片」を引用する。これはチチハルの黒龍江衙門で手に入れたもののようである。]

六月六日に教会を焼いた後、連日拳民は官軍とともに、省城の南北両路において鉄道を拆焼し、洋兵を攻撃しています。なお助けになるといえます。ただ奉天の教民

は甚だ多く、平日怨みを平民に結んでおり、すでに相い持して下らざる勢いにあります、……もし拳民と官軍をともに随時（かつてに）剿撫させると、敵前の兵力を分ける恐れがあります。それで、われわれは熟慮を重ねて、奉天省のすでに作った団練を再び整頓し、屯鎮の大小を論ずることなく、各の精士の民団を錬ずれば、間里を衛るに足り、教民をして畏懼させ、あえてその奸計を施さず、自然と邪を棄て正に入るようになるでしょう。これまた害を未萌のまま鎖す道であります。況や四境に団練があれば、土匪を鎮撫させうるだけでなく、洋兵の小集団に遇っても、痛撃を与え、逃げ道をなくさせることができます。官兵に較べて捜捕も「大拳」には容易です。官兵が戦闘するときには、近く「大拳」（民団）が援助し、軍器食糧を届けますから、その益はますます大きいものがあります。

これは七月三日に皇帝の批准を経た。こうして、南満洲において国家の軍隊の新しい源が起り、発達したのである。北京の宮廷の二面性について語る必要はないだろう。

VII（吉林省・黒龍江省）

北京の宮廷はすぐに吉林省と黒龍江省でも同じシステムを導入することに決定した。

六月十六日、吉林副都統の成勳と伯都訥副都

統の嵩崑が義和団団練大臣に任命された。これに関する文書往復が奉天のそれと同じようにあり、かれらの報告が残っている。ここでは嵩崑のみを引用する〔筆者註：『義和団档案史料』上、409 頁には成勳の摺は入っているが、嵩崑の報告は無い〕。そこには興味深い一節がある。「義和団の訓練に関する天からわれわれに委ねられた責任は、敵の行動に対する措置を採り、幹線道路の破壊にある」というのである。つまり、

「ロシアの軍隊食糧の幹線の破壊、主要戦略拠点の防衛が重要で、それには部隊配置とともに、「大拳」の協力が要る、そのためには彼らの訓練のために、成勳、嵩崑を派する、また同じように黒龍江の寿山にも同様のことを、六百里を以って知らせる」、とある。

このことが如何に大きなものであるかについては、「下（編）」で見ることにしよう。

（以上）

ールダコフが「下（編）」を書いたのかどうかは、現在のところ未確認であるが、ボクサニンが指示するルダコフ著作の、ロシア軍との衝突についての言及の頁は 77 頁となっており、東洋文庫所蔵の論文は総数 50 頁で、雑誌の 141 頁から 191 頁のノンブルが付いているから、著作はこの先も論述が続くらしい。おそらく、下編を書いて、それを合わせて一冊の本にしたものと思われる。Andrew Malozemoff, *Russian Far Eastern Policy, 1881-1904* (California U. P., 1958) は、

そのビブリオで一九三一年版を挙げている。冒頭の『庚子国変記』の「序言」はこの版で言及したのであろう。下編・著作については機会があれば探して、言及したいと思うが、ロシア軍と清軍・義和団との戦争については別途研究し発表する予定もあるので、それに委ねることもできようから、義和団研究としてはここまででも十分であり、今はここで一応完結させることとしたい。

おわりに一批評

さて、この論文をどのように評価するかについて簡単に言及しておこう。

私もいままでそれなりに多くの義和団に関する外国人の研究を読んできたが、この研究は今日でも「先進的」であると思う。それは二つの意味においてそうだと思う。

一つは、この中国の反抗を眺めるもう一つ別の視点を持っていたという点である。先にも言及したが、この運動を大きく世界に知らしめたのは、英米系のプロテスタント宣教師たちだった。研究史的に言えば、当時山東省にいた ABCFM の A. スミスの *China in Convulsion* は、義和団は団練の姿で現れてきた、という団練起源説であるが、これは前著その他で指摘したように、一八九五年以後強まっていた英米プロテスタント宣教師の、キリスト教中国布教を阻害する中国官憲の妨害を排除するために、官吏を懲罰し、一罰百戒を与えるべきだ、それが対中

国政策（門戸開放政策）にも有利だ、という彼らの観点からする言説であって、反外国キリスト教の運動を、山東巡撫統賢が擁護し支持しているから、これを排除するために、この騒動は官の許可下の団練が起しているのだから、官・政府の責任を外交的に非難迫及し、布教障害を取り除け、そうすれば中国のキリスト教化による文明化が進むのだ、という主張、アメリカ国家の外交軍事介入を要請した行動を正当化する、アメリカの公衆向けの言説、レトリックだったのである。この団練起源説はその後、G. N. スタイガーの国民革命期の反帝国主義熱狂に触発された上海での義和団研究で、より精緻化された。それ以来、これが圧倒的な力で義和団事件の歴史研究を支配してきた。そうした研究言説のなかで、同教会にいてスミスとは異なった見解を持った、H. D. ポーターの教派起源説は埋没させられ、このルダコフの研究も顧みられることは無かったのである。ルダコフの場合は、勿論、革命後のソ連の義和団研究がレーニンの「中国の戦争」の影響下におかれたという事情もあった。しかし、ルダコフが言うように、英米系宣教師たちは、直隸・山東でのこの運動の性質を研究することに失敗したと言わざるを得ない。特に言えることは、その思想教義の把握理解については完全な失敗に終わった。団練起源であるから、騒動は中国人の外国嫌い（xenophobia）で処理すればよく、運動の教義や思想についてことさら立ち入った分析考察は

必要ないと排除されたのだ。アメリカのその後の研究、例えばJ. エシェリックやP. コーエンの研究もこの点に関する限り同じ失敗をしている。

だが、この不思議な民衆運動の特質（思想主張）は一体何に由来するのかを中国文化に沿って理解しようとするれば、ルダコフやポーターのように教派起源論にならざるを得ないのである。その他の点でも、この論文は、この英米系の宣教師や学者の義和団理解とは違った視点から捉えた「義和団論」として、高いレベルにある。それも一九〇一年に出されていることは驚きを感じさせる。ロシアでこの研究が継承されなかったことは不幸だったと言わざるを得ない。

しかし、英米系の団練起源説でも、さすがに当時流布して力を持っていた勞乃宣の白蓮教起源説は完全に否定しきれずに、それが残ったから、後年、研究上、団練説と教派説が対立して論争されることになり、義和団をめぐる最大の論争点になった。この対立は拙著『義和団の起源とその運動』で決着がつけられたが、他のロシア人や、オーストリア人外交官ロストフォーンなどの、西欧人の中国での行為に批判的だった当時の言説も、第一次大戦後のロシア革命やオーストリア・ハンガリー帝国の解体などの影響もあって、研究史上顧慮されることなくきたのである。その失われた視点を復活させる意味でも、価値がある。

第二に、このルダコフの研究を、H. D. ポー

ターなどの教派起源説研究と繋げてみると、その思想の内部に視線を差し込もうという姿勢に一脈通じるものがある。対象に沿いながらその文化的意味を理解しようという研究姿勢である。それらの把握を勞乃宣の説と総合してみると、大枠として、私の主張する、民間宗教である白蓮教（八卦教）と結びついた宗教的武術起源説になるであろうが、その意味で、ルダコフの論文の、天、諸神の降霊、超自然的力、道教的体操（身体技術）など、ポピュラーカルチャーを背景に持った教派活動から出て来たのだとする洞察は、一九八〇年代以後の社会・文化史的歴史研究の思考と一脈通じるところがあり、今日でも古さを感じさせない。勿論、民間宗教＝白蓮教研究がほとんどなかった一九〇一年の段階では、その宗教的起源を「道教」や「扶鸞」等のシャーマニズムに求めることになったのはやむを得ないことだが、それでも十分慧眼であり、その思想教義の構造的把握はかなりの程度成功していて、今日でも首肯させる力を持っている。その意味でも「先進的」性格をもっているといつて良いのである。

さらに捕捉的につけ加えれば、当時の中国が「集団ヒステリー」の狂気状況にあったこと、知識人さえその影響を免れ得なかったことをよく描き出している。それは、後年の文化大革命の狂乱さえ感じさせるものだったことがよく窺われるのである。そして、それが宗教性を帯びた「聖戦」という意識に近かったことの指摘で

ある。『祖国と真理を保衛する』と書かれた義和団の旗がロシア軍によって捕獲されているが

(B. B. 戈利岑『中東鉄路護衛隊参加一九〇〇年満洲事件紀略』、商務印書館、1984、201 頁)、
こうした宗教性をもったナショナリズムの特質をよく把握していると言ってよい。この点でも論文は今日なお大きな意義をもつのである。

(さとう きみひこ・東京外国語大学)